

現代の ことば

ふじはら
藤原

たつし
辰史

卒業論文の追い込みの季節である。地面に落ちた銀杏からあの匂いが漂うようになる。布団を敷いたままのこたつの上に史料や本を積んで、フリースを繰り返し厚さ3枚のノートパソコンに罵声を浴びせていた学生時代を思い出す。

まなお鮮烈だ。卒論執筆予定者たちが集まるゼミで、仲間の報告に対し学生たちは全くコメントをしないのである。もう一人の教員と私と学生のやりとりばかりで、学生と学生のあいだで全く言葉が交わされない。他の学生の発表中に自分の発表の準備をしたり、文献を読み始めたりする。仲間がどんな問題意識をもちどんな悩みを抱えているか、ほとんど関心がない。何度か

卒業論文の効用



学生に発言を促したが変わらぬ、無力さに苛まれた。もちろん、仲間に無関心のままでも真面目な学生は優れた論文を書く。調査地に何度も通って卒論を仕上げ、調査とプレゼンのスキルを身につけて、大手企業や中央官庁に就職していく。だが、私の頭に「アウシュヴィッツへの道は無関心で舗装されている」というナチズム研究者の言葉が何度よぎったことか！

自分とは全く異なるテーマに取り組む学生の報告に耳を傾け、自分の問題として引き受け、意見が言えるか、それこそが卒論指導の真の目標ではないのか。仲間に無関心な学生の論文は、報告書としてどれほど優れていても論として奥行きがない。実はこれは学生だけの問題ではない。学会や研究会に出席すると、自分の準備に追われ別の発表者の報告をほとんど聞かない大学教員に出くわすことが増えた。無関心はもはや大学の病である。

先月22日に、京都大人文研で開催された「大学とはなにか」という公開シンポジウムで橋本伸也さんと山室信一さんの講演を聴いて思ったのは、大学を覆う無関心は、「高等教育は、学術研究を深めるのではなく、もっと社会のニーズを見すえた、もっと実践的な、職業教育を行う」と(5月6日)と首相が世界に公言して恥しない国では当然だということだった。

大学はいまや、すぐに役立つ利益を追求しすぐに役立つ学生を生産する経営体だ。大学の教員と職員は単年度の評価の数値化を要求され、官僚向けの書類書きに日夜明け暮らして、研究を深める余裕をもたない。就職活動に心血を注ぎ、職業訓練の一環として卒論を無駄なく書く学生にも、自分と異なる人間の考えたい

る世界について思いを巡らすゆとりはもはやない。だが、自分の研究室を就職率で売り込む教員が無関心エリートを量産するような「職業教育」は、アウシュヴィッツでこそ効果を発揮する。歴史がこれを証明している。

もちろん、学問の場合は大学だけでない。学問がしばしば大学の外で進展したのも紛れもない事実である。ただ、幸か不幸かいまの大学は現代社会の縮図である。そうである以上、やはり大学の劣化に目をそらすことはできないのである。

(京都大人文学研究所准教授・農業史)